

平成30年度 万葉文化館第一回授業づくりセミナー概要報告

日時 平成30年7月21日(土) 10時30分～12時30分

場所 奈良県立万葉文化館 会議室

参加者 新宮 済・石原宏一(平城小)、河合摩子(佐保小)、中澤哲哉(平群北小)、中矢和美(学校支援員)

井上さやか(万葉文化館)、北村恭康(奈良教育大)

内容

初めに、万葉文化館指導研究員井上さやか氏より、「万葉集と飛鳥」という題で万葉集の魅力を語っていただき、子どもたちが興味を抱くような万葉クイズの例も示していただいた。

○万葉クイズ (一のところはどう読むのか)

- ・ 寒過 暖来良思 朝鳥指 滓鹿能山尔 霞軽引

【一が終わって一が来たらしい。朝日のさす春日山に霞がたなびくことよ】

- ・ 若草乃 新手枕乎 卷始而 夜哉将間 二八一不在国

【若草のように初々しい手枕を初めてまいてどうして夜を隔てよう。一などないものを】

○飛鳥宮 一飛鳥と明日香一

- ・ わが里に大雪降り大原の古りにし里に落らまくは後 (天武天皇 ⇒ 藤原夫人)

└ (現 小原) (距離感)

└ 雪を自慢している(政治が良いから天変地異も起こらない)

当時は一夫多妻であり別居婚であった。

- ・ わが岡の霏に言ひて落らしめし雪の摧けし其処に散りけむ (藤原夫人 ⇒ 天武天皇)

(竜神・水神)

(おこぼれ)

- ・ 采女の袖吹きかへず明日香風都を遠みいたずらに吹く

(距離感)

飛鳥時代には「庭」という発想がない

「采女」 地方豪族の娘 聡明であり美人だったかも

飛鳥 明日香

現村名は「明日香」 大字命に「飛鳥」もある。

『万葉集・古事記・日本書紀』での表記は 「飛鳥」「明日香」「阿須可」「安須可」などがある。

飛鳥池工房遺跡(7世紀後半)から「飛鳥寺」と書かれた木簡が出土(現存最古)

- ・ このころには「飛鳥」が定着していたのではないだろうか。

○その後の飛鳥

- ・ 飛鳥の明日香の里を置きて去なば君があたりは見えずかもあらん

(とぶとり)

飛鳥は明日香という土地に係る枕詞。 明日香をほめる言葉であったのが、「飛鳥」と書いて「アスカ」と読むようになったのではないか。

○石原宏一先生の 単元構想より (奈良市立平城小学校)

いにしえから学ぶ ～わたしの夏～

万葉集は四季をよんだ歌が多い。昔の人が心動いたことと風景を結び付けて表現したように、指導にも夏休みで一番心動いたことについて、その景色の描写を七音五音に凝縮して表現させたい。

- ・四季の分類は ⇒ 春(1月～3月)・夏(4月～6月)・秋(7月～9月)・冬(10月～12月)
各季節の変わり目に土用がある(今の土用のウナギの土用、この時代には年4回あった)

中国江南地方の季節感に合う

持統天皇の

春過ぎて 夏来るらし 白袴の 衣乾したり 天の香具山

四季を初めて読んだ歌

春 生命の息吹を感じる 芽吹く

秋 収穫があり 満ち足りている

農耕からの感覚ではないだろうか。



- ・万葉集全 20 巻のうち四季分類がされているのは 8 巻と 10 巻のみです。この 2 巻の編纂は、奈良時代に大伴家持が編纂したといわれています。

- ・奈良時代になると四季が意識されるようになりました。

- ・たくさん読まれている季節は

四季分類がされている 8 巻と 10 巻を見ると (784 首)

秋 441 首 春 172 首 夏 104 首 冬 67 首 秋が一番多い

動物では

ホトトギス 154 首 **カリ** 65 首 **シカ** 58 首 ウグイス 51 首 タズ(鶴) 45 首

植物では

ハギ 141 首 ウメ 118 首 **ヌバタマ** 80 首 **モミヂ** 78 首 マツ 77 首

太字は秋のものである。

◇終了後、新宮先生は「稲・田」・石原両先生は「季節」を読み込んだ歌を図書室にて検索。

連絡

※ 次回以降の授業セミナーの実施日

8月10日(金)・9月15日(土)・11月23日(金)・12月15日(土)